1Ea-7　　被服の模様と色彩の変化によるイメージ効果

―― 平面と立体状態の比較 ――

椙山女学園大生活科学　　○橋本令子　加藤雪枝

目的　平面状態である被服地から被服着装上のイメージ効果を予測することは、被服計画上必要である。この観点から実際の被服地模様をＣＧに取り込み、色相を変化させた平面状態と、この模様をブラウスとワンピースの着装した状態に合成させた立体状態の見えが、どのようなイメージ変化をもたらすかを調べた。そしてイメージの形成要因について分析を行い、両者を比較検討した。

方法　被服地の模様は具象形、抽象形、幾何形の計25種を選出し、ＤＥＮＧＡ[2]を使用し赤、黄、青を基本色とした同等と対照、灰を基本色とした無彩色の組合せの平面配色模様 175種を作成した。次に白地のブラウスとワンピースの２種の服装に、ＣＧ上で合成し立体状態を作成した。本学学生30名の被験者が、モニター上の映像を12形容詞対を用いて５段階評価した。そして因子分析を行い模様と色彩変化によるイメージを求めるとともに要因分析により模様、基本色、配色、配色数、衣服の形式とイメージの関係を検討した。

結果　平面状態による模様のイメージは評価性、現代性、暖かさの３因子が抽出され、立体状態においても同様の傾向を示した。要因分析の結果、各因子に及ぼす影響は平面状態の場合、評価性の因子には同等の配色が作用し、現代性の因子には配色数の多い模様が影響し、暖かさの因子には基本色が作用する。立体状態の場合は暖かさの因子が平面状態と同様であるが、評価性の因子には配色数の多い模様と配色、現代性の因子には模様と衣服の形式が影響した。以上より、平面と立体のイメージは同様であるが、そのイメージを表現する要素に相違が認められた。